

ゴシック・リバイバル——英国の象嵌タイル *Gothic Revival*

author 竹多 格 | Itaru Takeda

ただいたる——INAXミュージアム推進グループ/1952年生まれ。京都工芸繊維大学大学院無機材料工学専攻修了。1979年、伊奈製陶(後のINAX、現LIXIL)入社。外装タイル工場技術課、仕入商品管理、博物館設立準備を経て、現職。

[クローズアップ・タイル]

象嵌タイル——1

中世においては、象嵌タイルは成形した粘土板に模様を彫り込み、そこに着色した泥しよ(濃い粘土の水溶液)を流し込んでつくっていた。19世紀になると、ミントン社が機械による大量生産技術を確認し、大いに普及した。成形方法は、模様を加工したローラーで粘度板に凹部分をつくり、泥しよを流し込む湿式成形法と、金型で模様をつくり、仕切りの中に粉末状の粘土を入れてプレスする乾式成形法の2つがある。下の写真は、中世の象嵌タイルに多用されていたバラのデザインを再現したもので、十字形の輪郭部はバラのとげ、あるいは切れ込みのある葉と思われる。4枚並べると、十字形の模様が浮かび上がり、星形と十字の組み合わせとなる[19世紀(オリジナルは14世紀)/152×152×24mm/ミントン製]



[タイルのデザイン]

タイルの図柄——2-6

ゴシック・リバイバルの流れの中で復興されたため、図柄にもバラや紋章など中世の象嵌タイルの図柄がそのまま使われているものが多い。なかには、水色や緑など、かつてはなかった色彩による新規のデザインもある。色は、技術の進歩も手伝って従来の単色象嵌から多色象嵌まで幅広い

2——中世の象嵌タイル[14世紀初頭/120×120×33mm]|3——バラ文象嵌タイル[19世紀/107×106×14mm]|4——草花文象嵌タイル[19世紀(オリジナルは14世紀)/151×151×24mm/ミントン製]|5——多色幾何学文象嵌タイル[19世紀/149×150×25mm/ミントン製]|6——多色草花文象嵌タイル[19世紀/151×151×15mm/ミントン製]|いずれも制作地はイギリス

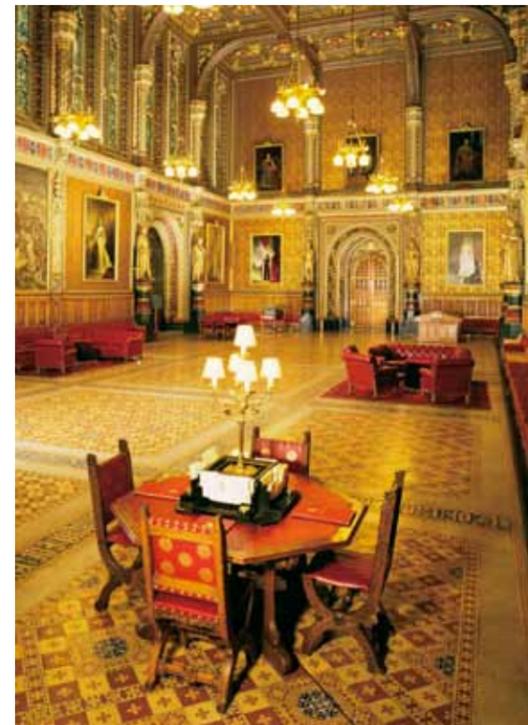
[タイルのある風景]

イギリスの国会議事堂——7

尖塔を持ったアーチなど、ゴシック様式を備えたイギリスの国会議事堂は、ゴシック・リバイバルの提唱者ピュージンによって設計された。内部の床や壁には、ミントン製の象嵌タイルが張られている



- イギリスにおける最も早い装飾タイルとされているのは、12-13世紀初頭にかけてフランスのシトー修道会の指導で制作された、幾何学模様の床用の手づくり象嵌タイルである。これらのタイルは、中世のカトリック教会などのゴシック建築に多用されたが、16世紀の中頃にイギリス国教会が確立されて以後は、修道会も解体され象嵌タイルは制作されなくなった。
- 19世紀に入ると、産業革命がもたらした社会的、精神的な弊害に対処するべく、中世のキリスト教社会に見られた伝統的な芸術や文化へ回帰しようとするゴシック・リバイバルが興った。建築分野では、ミントン社創業者の息子ハーバード・ミントンが、1828年に中世以来途絶えていた象嵌タイルの制作を復活させた。やがて機械による製造技術も確立し、1870年代には象嵌タイルの普及が頂点に達した。その立役者は、当時、活躍したゴシック・リバイバル提唱者の建築家ピュージンで、彼はゴシック様式の教会堂の建設や修理だけでなく、学校、宮殿、庁舎、民家などあらゆる建物に、タイル張りの良さを力説して普及に努めた。また、ピュージンは、装飾に永遠性を求めたため、赤レンガやタイルによる装飾など、素材そのものの色彩を活かせる方法を好み、象嵌タイルを推奨した。
- 象嵌タイルをきっかけとして、陶器質の美しいデザインタイルが開花する。当時の女王の名前から“ヴィクトリアン・タイル”と呼ばれ、素晴らしいタイル文化を築いていく。
- 象嵌タイルは、ベースとなるタイル生地の表面に1mm程度の厚さで、ベースとは異なる色の粘土を嵌め込んで模様を表現したもので、当初は中世にならってベースのレンガ色にクリーム色の模様を施したものが多かった。その後、黒やクリーム色のベースに多色の模様を施したものが登場し、ヴィクトリアン・タイルのスタイルを確立した。象嵌技法には、ベースと象嵌部の材料の違いによる亀裂や剥離といった難しさがあるが、ミントンなどのタイルメーカーは、その解決と同時に機械生産の確立という課題も見事に克服した。その当時の技術力を超えるメーカーは、その後は登場していない。



ここで紹介しているタイルは「世界のタイル博物館」で常設展示しています。